

令和3年度一般選抜（前期日程） 地理歴史 出題の意図

2021年度 日本史 出題意図と講評

（Ⅰ）

神仏習合は日本史を理解する上で、極めて重要な宗教現象である。この設問では、奈良・平安時代に限定する形で、神仏習合の展開過程について問うた。神宮寺、神前読経、修験道、本地垂迹説など、いくつかのキーワードが思い浮かぶであろうが、それぞれの具体的な内容やその歴史的背景についても適宜触れつつ、神仏習合の歴史的展開を具体的に論述できるかどうかを主として問うたものである。もちろん、奈良・平安時代の神仏習合に関わる事項であれば、上記のキーワードに特に拘るものではないことを念のため断っておく。神仏習合の指し示す範囲が広いこともあって、何も書けていない答案はほぼ皆無であった。しかし、バランスのよい叙述ができているものとなると、あまり多くなかった。なお、少なからざる答案において、度会家行が神本仏迹説を唱えたことに触れていたが、これは平安時代のことではない。

（Ⅱ）

本設問は、承久の乱によって、鎌倉幕府と朝廷との関係がどのように変化したのかについて問うたものである。承久の乱以前は原則として、畿内・西国に基盤を置きながら国政を主導する朝廷と、東国を基盤に軍事警察権を行使する鎌倉幕府が二元的に支配する体制であったが、承久の乱の勝利により、幕府は三上皇を配流するとともに、朝廷を監視する六波羅探題を京都に設置し、また3000余箇所といわれる上皇方の所領を没収して新たに地頭を置き、得分の少ない所領では新補立法を適用するなどして、西国にも地頭制を大きく展開させた。こうして幕府権力が畿内・西国でも強化され、乱後は皇位継承や朝廷の国政運営にも幕府が干渉するようになった。以上のような基本的な事実を、正確に論述することが求められたが、答案のなかには、議奏公卿の設置などを記すものもあり、歴史用語の知識だけでなく、それが登場する時代背景を理解することが必要である。

（Ⅲ）

本設問は、天明の飢饉が農村と都市に広範な影響を及ぼしたことをうけ、寛政の改革における諸政策のうち、とくに農村復興政策について問うたものである。解答にあたっては、まず飢饉がもたらした影響とはどのようなものかをおさえる必要がある。例えば、農村の荒廃や人口の流出などであり、飢饉そのものの再発も防止しなければならない。そのうえで、それらへの対応策としては、まず飢饉の再発防止策として社倉・義倉による困米が想起されようし、荒地を復旧するための公金貸付策、都市部へ流出した人口を農村に戻すための旧里帰農令といったような政策がとられたことも学習したであろうから、それらを字数制限も意識しながら的確に論述することが求められた。しかし、答案においては、飢饉の影響に言及しないまま、いきなり寛政の改革の諸政策を列記しているだけのものが目立った。改革の各政

策の求められた背景をも理解し、説明できる学習が必要である。

(IV)

帝国議会が開設されてからしばらくの間、地租問題は政界の重要な争点であった。本設問では、この地租問題を手がかりに近代政治史についての理解を問うた。初期議会においては、「政費節減・民力休養」を掲げて地租軽減を求める民党と、それに応じない藩閥政府が激しく対立した。ところが、日清戦争後になると、大規模な軍拡の財源として増税を図る必要から政党の地位が上昇し、藩閥政府が政党との提携に踏み切り、地租増徴案の議会での否決を経て、最初の政党内閣である隈板内閣の成立に至る。問題文に「藩閥政府と政党との関係に留意しつつ」とあることを踏まえ、第二次山県有朋内閣が旧自由党系の憲政党と提携して地租増徴を実現させるまでの、こうした政治史の流れを的確に押さえることが肝要である。学習が間に合わなかったのか、地租改正や地租改正反対一揆についてまとめた的外れなものや、白紙に近い答案が多く、出来具合に二極化と言っても差し支えないほどの差が見られた。

2021年度 世界史 出題意図と講評

(I)

中世から連続する一連のキリスト教の改革運動、すなわちローマ・カトリック教会の「腐敗」への非難と「真の」キリスト教信仰の模索の流れの上に、16世紀の宗教改革を位置付けることを求めた出題である。

問1・問2

聖職者のみが神と一般信徒とを媒介するローマ・カトリック教会に対して、14世紀イングランドの神学者ウィクリフはそれを「異端者」と非難し、一般信徒が聖書に基づいて直接、神の言葉を知り、信仰できるよう、聖書を民衆語に翻訳した。この聖書を中心とする信仰形態を目指す運動は、ボヘミアのフス、そしてザクセンのルターへと引き継がれていく。

問3

11世紀には、グレゴリウス7世らクリュニー修道院出身の教皇らが、その当時、常態化していた俗人による聖職者の任命権の掌握や聖職者の妻帯など、聖俗が混交する状況に対して、教皇に叙任権を帰属させ、聖職者の綱紀粛正を行うことで教会を純化させる運動を展開した。13世紀には、聖職者の私財の蓄積による墮落に対して、俗人民衆が清貧を掲げ、聖職者とは異なる信仰のあり方を目指した。この新たな宗教運動に対し、ローマ・カトリック教会は、托鉢修道会のフランチェスコ会を認可し内部に取り込む一方、カタリ派を異端とみなし弾圧した。

(II)

画像史料を基に、大型草食獣の贈与行為が、権力者による普遍性の演出の一環であったことを視覚的に読み取らせ、これを世界史教科書にも頻出する鄭和の大航海・フィレンツェでの「文芸復興」と関連づけて論理的に記述させることを意図した。

問1

沈度が題頌を記述した中央研究院所蔵の絵画を素材にして、初期明朝の軍事的・政治的動態から儀礼上の権威付けが必要であったこと、このため朱棣によるモンゴル遠征やベトナム遠征へのインセンティブが生じたこと、その一環として、イスラーム・ネットワークを活用した鄭和の活動があったこと、以上が聖獣・吉祥という中華的文脈にて位置づけられたことを読みとらせようとした。個別の史実に論及しつつ一貫性をもって論述できているか、採点の際には重視した。リード文・問いかけ文にいくつか解答を誘導する文を入れておいたためか、全体としてはよく論述できていたが、リード文の表現をそのまま使用した解答・白紙の答案もあった。

問2

問1のものと同時代・同様の主題を用いたヴァザーリの絵画を用い、北イタリアの地理的位置と産業、イスラームとの交流、コンスタンティノープル陥落など同時期の東地中海における政治変動と関連づけたうえで、イタリア・ルネサンスについて記述させる出題。「イタリア半島外部の要素」というかたちで問いかけ文に対して、アルプス以北のルネサンスの詳細について述べるという、典型的な「西欧中心型」のルネサンス記述がかなり見られた。広く地中海沿岸地域の動向にもっと着目する必要がある。

(Ⅲ)

イスラーム文化圏についての基礎知識を幅広く確認し、現代のスナ派とシーア派の宗派对立が含み持つ教義的側面と歴史的側面を理解しているかを問う問題である。両派の対立の歴史的起点をムハンマドとカリフたちの行状という初期イスラーム史に拠って説明したうえで、両派の関係性をスナ派王朝であるウマイヤ朝とアッバース朝の宗教事情に言及しつつ、対立的なものとなった過程を論じることが求められた。正答率は高く、大部分の受験生が基本事項をしっかり身につけていることが確認できた。

(I)

世界の民族問題と紛争や難民をめぐる問題，およびその背景としての民族・言語・国家の諸関係について問うたものである。主題図を読む基本的な力のほか，紛争や難民問題の背景となる歴史的プロセスや，民族や言語に対する理解力を試すことを主眼としている。すべて教科書の知識で対応できるが，論述するためには表層的な知識のみではなく，民族・言語や国家に対する抽象的なレベルでの理解が必要とされる。

問 1

難民を大量に受け入れている国を分布図で確認し，主に二つのパターンがあることを理解すれば解答は容易である。一つには，主要な難民受入国は発生国の近隣の国々であり，もう一つは，2015 年の難民危機を契機に大量の難民を受け入れる決断をしたドイツを始めとする欧州諸国である。後者の論述には，時事的な問題に対する最低限の知識も必要となるだろう。

問 2

一つの地域で起こった紛争に関する論述だが，問われているのは単なる地誌的な知識というよりは，紛争の発生にみられる歴史的・地理的な背景である。具体的には，1990 年代に民族紛争が多発した背景に冷戦体制の崩壊があったことや，バルカン半島の複雑な民族・宗教分布の背景には歴史上のさまざまな帝国による支配があったことなどである。こうした背景的な事項を中心に論述すれば，具体的な国・地域の名称を使わずとも解答が可能である。

問 3

言語と民族，民族と国家，国家と言語の三つの関係について論述を求めるもので，具体的な民族・言語名の使用を禁じたのは，単に知っている事例を羅列して埋めるだけの答案を防ぐためであった。三つの関係については，教科書の本文にも記述されていることだが，その教科書記述をしっかりと咀嚼^{そしやく}した上で事例と関連付けて理解している受験生は意外に少ないのではないかと考えて出題した。理解の深さ・正確さが答案に明確にあらわれやすい問題である。

(II)

北極圏に関する，自然環境・交通・資源についての基本的な事項についての出題である。北極圏に関わる地誌の項目について，高等学校の地理教科書においては独立して扱われている場合もあるが，ロシア・ヨーロッパ・北米のそれぞれの北部地域の地誌の項目において記述されている場合も多い。それらを総合的に把握・理解していれば，容易に解答できよう。また，北極圏などに関わる環境・時事問題などについても，日ごろから関心を持ってもらいたい。

問 1

基本的には，北極圏の大部分が寒帯気候（E）に属し，グリーンランド内陸には氷雪気候（EF），その他の地域にはツンドラ気候（ET）が分布する。いずれも大規模な樹林帯が見られ難い気候であるが，一部には冷帯（亜寒帯）気候（D）の区域もある。地球温暖化の影響

で海氷が減少し、ホッキョクグマなどの生息域が制限されるなどして、生態系や狩猟民族の生活に影響が出ている。その一方で、海氷の減少は船舶航行の安全性を高めた側面もある。また、永久凍土の融解にともなうメタンガスの放出や地面の陥没による被害もある。最近では北極海の上空でのオゾンホールの出現も南極同様に注目されている。一般的な気候の状況と近年の気候変動およびその影響に目配りした解答が期待される。

問 2

陸・海・空の各面での交通への言及が望まれる。空路としては、大圏航路の北極圏ルートが国際的に活用されてきたが、軍事と民間の二面における利用の点で安全性の問題がある。海上交通においては、各沿岸域での鉱産資源などの船舶による大量輸送のほか、海氷等の減少による航路利用の拡大に伴い、国際航路拡張の可能性が増しているが、国際的な海洋進出の活動が盛んになると安全保障面での問題が生じうる。陸路に関しては、気候上の制約が大きい。

問 3

北極圏とその周辺には、エネルギー資源関係では、未開発のものも含め、油田や天然ガス田が複数箇所に見られる。海底下のものもあるが、技術革新とエネルギー価格の高騰を追い風として開発が進んできた。金属類や他の資源として、鉄・金・ニッケル・ダイヤモンド・石炭などの鉱山もあり、過酷な自然条件下で開発や輸送のコストが割高となるものの、採掘・開発が為されてきた。コスト高ではあるが付加価値の高い鉱産資源を中心にした記述がまずは求められるが、このほかに水産資源、観光資源、一部の冷帯における木材資源の利用も付加的には考えられうる。